

未来はどうなる？

市場に出回る商品の価格は、供給と需要の変動に影響されます。企業は原料を価格が安いときに仕入れたいと思うのですが、数か月前に注文を入れるのがふつうです。注文を出した日の価格で支払うとすると、数か月後に価格がさがってれば損を、あがってれば得をします。

賭け

石油や鉱物、小麦のような産物は商品市場で取引されます。たとえば石油掘削会社は、製油所にバレル単位で原油をおろしますが、町の市場のように客が買った商品を家に持ち帰るといわけにはいきません。買い手がいますぐ使いたとしても、原油はその場にはありません。よその国に、もっと言えばまだ大地に眠っているかもしれません。それに、お金のやり取りもその場ではおこなわれません。

買い手は、未来の約束された日に、約束された量の価格を支払う約束をするだけです。このような契約を“先渡し契約”あるいは“先渡し”と呼びます。契約が結ばれた日が実際には数か月前なので、売り手も買い手も、価格の変動を見こして未来の価格に賭けるのです。原

油が引き渡されて支払いがすむ前に、このような契約が、べつの人の手にわたることもあります。買い手は、供給するという契約を持っている人から原油を買い、売り手は、買うという契約を持っている相手に原油を供給するのです。もともとの契約が結ばれた日から契約終了日までのあいだに、先渡し契約の当事者が何度も代わることもあります。

約束、約束

先渡し契約が売買されるのが、産物市場です。そこで売買されるのは産物ではなく約束です。約束の価値は産物から派生するので、金融派生商品と呼ばれています。

外国為替市場のディーラーは、決まった日に決まった為替レートで通貨を売買するという先渡し契約を作成

金融派生商品の価格は、取引される実際の物の価値よりも高いのがふつうだ。

**金融派生商品は、
金融の大量破壊兵器だ。**

——ウォーレン・バフェット、
アメリカ実業界の大物で投資家

し、これもまた取引の対象になります。金融派生商品には、契約が存在するかがり、売買できるものならなんでも含まれます。

クレジット・デフォルト・オブリゲーションや金融派生商品をちゃんと理解しているのは、ミスター・バフェットと、彼が作ったコンピュータぐらいなものだ。

——リチャード・ドーリング、アメリカの小説家

幸運を祈る

銀行と結ぶローン契約さえ金融派生商品とみなされます。産物を売買する先渡し契約と同様、ローン契約も一定期間のあいだに支払うというものです。ですから、銀行はこの負債を“金融商品”として売ることができず。金融派生商品そのものも売買の対象なので、売り手と買い手のあいだで契約が結ばれます。これがまた金融派生商品の金融派生商品として扱われ、複雑さは増すばかりです。金融派生商品の売買は——経済学者にとってさえ——わかりにくいものですが、契約の当事者は、同意した価格が自分の都合のよいほうに動くか、まったく動かないことを願っているという点では、ふつうの取引とおなじです。

空売り

金融派生商品のトレーダーは、価格がさがっても、“空売り”によって金もうけできる。たとえば、100株を借りて（買うのではない）、1株10ドルで売り、1000ドルもうける。株価が5ドルまでさがると、500ドルで買いもどす。それから、株（それに借入れ費用）を貸し手に返す。差額の500ドルは手元に残る。

将来の取引条件で合意にいたると、実際に価格がどうなるか予想しようと躍起になる。

売り手と買い手は、

